

甘えられない子どもたち 2

「変わるとき」

高橋健雄

<http://mindsun.net/>

変わりたい

A子の作文からは、痛々しい気持ちが伝わってきます。この文には、甘えたいけれど受け止めてもらえなかった母への反抗と、自立しようする「わたし」が表現されています。

彼女の父母は幼少期に離婚したため、主に祖父母の手で育てられてきました。中学生の時に母の再婚となり、それまで十分に依存できなかった母への不満と、義父の出現による不安と葛藤の中でひどく荒れたのです。飲酒、万引き、繁華街での暴力行為や恐喝などを繰り返してきたのです。

A子との長い面談と作文の時間が終わった後、「先生、なんか私変わるかも知れない」。こう言って彼女は笑顔で部屋を出たのでした。

同時期に、近隣の親しい婦人が次のように語ってくれます。「お母さんにはお母さんの幸せがあるの。Aちゃんには、Aちゃんの幸せがきっとあるよ」。

やがてA子は、母なる存在と母も一人の人という相対化した母を見つめられるようになり、さらに「わたし」を見守ってくれている婦人がいることに気づきます。この後、彼女は、母から離れての暮らしにピリオドを打ち、母と生活を始めました。A子は母に甘えられるようになり、友人や居場所に恵まれて家庭生活も落ち着きました。

思春期の子どもたちが自立しようとするとき、それは今ある「わたし」と、それを乗り越えようとする「わたし」とのはてしない葛藤の中で展開されていくものです。善くなるようにする心とそうなれない心とに揺れながら、苦しみながら成長していきます。心の中の私と言葉や行動で現される私との違いに苦しみ、他者からみた私は本当の私ではないと、もがいているのです。

そして、その場しのぎや幼い子どもじみた行動をしながら、いつか飛躍する機会をうかがっているのです。思春期は、古い今までの「自分くずし」をしながら、新しい「自分づくり」をおこなっている時期なのです。

私たち大人にとって必要なことは、子どもの行動を単純に非難し小言を言うことではなく、子どもの中に今の自分を乗り越えようとする「わたし」が存在していることを固く信じていくことではないでしょうか。

ところで、私は不登校など様々な相談を時として受けています。最初は子どもの話が中心になりますが、そのうち夫婦の話や母親自身の悩みの相談となることも多いのです。

たとえば、親自身が過剰な干渉を受けて育ってきて、夫が幼児的支配的であることがあります。また、母親は夫に気兼ねして「わたし」を表現できていない場合も少なくありません。このような場合、母親自身の葛藤が子どもたちに投影されていることも往々にしてあるのです。私が多く感じるのは、「わたし」の気持ちを聞いてもらえていないことからくる抑えられた心理的葛藤です。

思春期と思秋期

子どもが問題行動を起こすときは、子どもをどのくらい信頼することができるかが問われる時期です。親の潜在意識に不安感があると子どもへの信頼感も揺らいでいきます。亀毛兎角の姿を見ているのではないか、親にとっても内なる「わたし」を見つめる時期なのだと思います。そして、親の心のあり様も創造的に修正していく必要性を感じています。子どもが思春期のとき、親は思秋期です。子どもが思春期の時期は、結婚するときにはどんな形で結婚したか、妊娠したときにはどんなふう感じたか、妻や夫とはどのような関係できたか、自分がどんな風に育ってきたか等々、次から次へと子どもから問われている時期でもあるのです。心配することはありません。自己憐憫はいけません、自分がどうやって生きてきたか、どのようにして行こうかと「わたし」の心を見つめて動いていくと、子どもたちはとても素敵な子どもになるのです。

時間的な制約もあり、A子のように自分と向き合えて変化する子は数少ない例ですが、非行の子に限らず不登校の子どもも母親たちも、「わたし」の気持ちを驚くほど聞かれてきていないのです。話すことは手ばなすことに通じます。また話すことは、気づきにつながるのです。安心感を得、心のうちを表現できるとき、人は変化することができるのだと思います。